
文章力不足注意「夏祭り」・・・友達が季節ネタをやってきたので晒す。

・・・友達が厨二病でうざいのであいつが書いたのを貼る

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文章力不足注意「夏祭り」・・・友達が季節ネタをやってきたので晒す。

【Nコード】

N7727M

【作者名】

・・・友達が厨二病でうざいのであいつが書いたのを貼る

【あらすじ】

夏祭りの夜、ちょっといろんな思いが交錯する。
って感じのを書こうとしてみました！

元曲：whiteberryの『夏祭り』

（前書き）

昨日祭りがあつたんで、ついでに打ち込んだきました。
それにしても・・・内容酷いな。

途中主人公キャラ変わっています。

しかも長めです。気をながくして読んで下さい

君が居た夏は遠い夢の中、空に消えてった打ち上げ花火。

病院の窓から少女は花火を見る。

付けっぱなしのラジオから音楽が流れ終わり、

DJの陽気な声が戻ってくる。

「はーい、いかにも夏っぽい曲でしたね」

DJの声とは裏腹に少女の顔はどこか切ない。

『お次も夏っぽい曲だ、P・N・コータローさんのリクエスト、
h i t e b e r r y で【夏祭り】』

声がラジオから流れると同時に少女が口を開いた。

『「君が居た夏は遠い夢の中、空に消えてった打ち上げ花火」』

少女はその曲を聴いて去年の夏祭りを思い出した。

わたしは那津雲^{なつぐも}ましろ。簡単に言っと今日はデートだ。

だが、目的はそれではない。

「ごめーん、浴衣着んのに手間取っちゃってさあ。」

「遅すぎるよ」

こいつは捺天^{なつぞら}ひかる

「ましろはさ、浴衣が似合うつてか可愛いつてか・・・」

ひかるの顔が赤い。

「ひかるも似合ってるよ」

「ありがと、頑張つて着た甲斐があったわ」

こうしてると普通のカップルみたいだな。こいつとは絶対そんなの
になりたくないけど。

「んじゃ、いこっか。」

「そだね」

二人は歩き出した。それぞれ違う思惑を持って。

しばらくすると、人、人、人。

凄い人の量。この辺の人みんないるんじゃないか、ってほどの人の量だ。

そんな中、少しひかるは前を歩いている。

少しずつ、少しずつ距離が遠ざかっていくのを感じる。

なぜか物寂しくなった。理由は分からないが。

「離れないで」そう口には出さず心の中で思った。

手でも繋げばよかったな。と後悔した。

その時、

ドーン！！、パラパラパラ・・・。

火花が上がった。それでこいつは、

「花火だ・・・」

と呟いてこつちを見た。

そして気が付いて、

「手、繋ぐ？」

ちよつと恥ずかしかったが、手を差し出した。

「いいよ」

あれ？私こいつのこと・・・

いや、今は感情を殺せ。あの子のことだけ考えるんだ。

二人で手を繋ぎながら、神社の中をどんどん進んでゆく。

「あ、金魚すくいでもやる？」

苦手なので断ることにした

「うーん、見てるだけでいいかな。」

というところには残念そうに

「あ、そう。じゃあ見ててよ！」

と、子供みたいな表情で言った。

こいつがこんなにもなるなんて、よっぽど自信があるらしいな。

「おっちゃん、一回」

といい、ポイを受け取ると
ばしゃばしゃばしゃっ

結構、獲った。

「どう？」

その後に、俺かっこいい？、がこいつの中では付いてるんだろうな。

「かっこいいよ」

そういつてほほえみ返した。

手ぶらで歩くのもなんなので、適当に夜店で二人で綿菓子を買った。
ふと横を見ると、こいつの友達がいた。

「・・・」

こいつはしかめっ面をして少し前を歩いた。
ちよつと寂しい

つてなにを思ってるんだわたしは！ もう。
ドーン！！、パラパラパラ・・・。

また花火だ。

「ねえねえ、手、もっかい繋ご」

と、ちよつと上目づかいで見してみる。

「あ、ああごめんな、離れてて」

やつと手、自分から繋げた

よく考えたら何をやってるんだわたしは！？

そつと二人で人混みから逃げ出した。

神社の石段で、持ってきた線香花火をやろうと私が誘ったのだ。

少し離れただけなのに、あの人混みから遠く遠く離れてしまった気がする。

「はい」

といって線香花火を一本手渡す。

「ありがとう」

といって、二人同時に火を付けた。

線香花火の火が落ちるまでの間、友達のこと、勉強のこと、親のこと、ゲームのこととかテレビのことまで話し合った。

火が落ちると、新しい線香花火に同時に火を付けた。

そしてまた、いろんな事を話した。

私はこいつのことが好きかも知れない。

じゃあ少しだけ恋人でいよう、たとえすぐ終わってしまっても。そうやって過ごしていると、最後の花火の火が落ちてしまった。

「もう・・・お終いだね」

仕方ないのかな、私の事情じゃないのに。

確かに今ここでやめてもいい、でも、やめてしまつと一生出来ない・・・気がする。

「ああ、これからどうする？」

「しかたないよね・・・」

言い聞かせるように呟いた。

「じゃあ・・・おえっ!？」

彼が私の腹を刺していた。包丁で。

「おいおい、恋人きどりかよ。ほんつと、やめてくれよ、そんなの。」

「・・・なんで? なんで!?!？」

「はあ? 馬鹿じゃねえの? 覚えてないとか言つなよ、お前に俺の両親は殺されたんだよ!」

覚えてなくてもないが、あれは・・・。

「それは事故だったじゃない!」

「ああ、確かに物心付いてないお前が、しでかした事故だった。でもな、それでもお前が親の仇であるのと変わりないんだよ!!!」

そうだったのか。この祭りは二人とも本心じゃなかったんだ・・・。寂しいな。そうだったんだ。

彼は血走った目で天に向かって言っていた。

「やっ
たよ・・・
みのり・・・」

みのり
・
・
・
？

その時のもうろうつとする私の頭では思い出せなかった。どうせ、本当の彼女だろう。

「じゃあ、そのみのりさんとも会えないね。」

「おまえ、なにを……ぐはっ」

彼の腹に包丁が刺さった。というか刺した、私が。

「へえ、じゃあ私も仇討ちでとこね……。」

聞こえてるかどうか分らないが、わたしはか細い声で言った。
すう、と息を吸い、一気にまくし立てた。

「友達の仇！つて覚えてないか。あんたがいじめて自殺に追い込んだあの子のことをね！」

結局、二人ともお互い殺意しか心の中になかったわけだ。

おもしろおかしい笑い話である。

「結局……二人は……結ばれないのね……。」

と呟いて意識が途切れた。・ ・ ・ ・ ・

その後わたしは、幸いにも一命を取り留めた。まあ一年ちよつと入院しなければならなかったのだが。

しかも正当防衛で捕まらずに済んだ。

あいつは・・・。

簡単に言うと死んでしまった。急所を刺されて。

確かにこの恨み合いはどちらかが死ぬまで終わらなかっただろう。でも、こんな終わり方って・・・

「こんなの無いよね・・・。」

と弦くと、

『いろんな事話したけれど、好きだって事が言えなかった』
最後のサビの手前だ。

「本当に、言えなかった」

ちょっと後悔したが、どうせ、断られていただろう。

ガラッ

病院の引き戸が開いた。

とつとつと・・・。

暗がりなので顔は見えないが、私より三つぐらい年下の身長だった。やがてその陰は私の上に乗って首を絞めだした。

一年動いてない私の体は、もう抵抗出来るほどの力は残ってなかった。

「・・・兄貴の仇」

影は言った。

みのり・・・そういえばあいつ、みのりっていう妹いたっけ。

ふと、視界の隅に、彼が見えた気がした。

憎しみのこもった顔じゃなく、お祭りの時のどこかわいげのある顔だった。

君となら・・・死んでもいいかな。

一緒なら・・・そっちに行ってもいいかな。

「なに？もつと苦しみなさいよ！ほら、もつと痛がりなさいよ！兄貴の分まで！！！」

憎しみのこもった声から、次第に悲痛な叫びに変わっていた。

「何で？何であんなに優しくかった兄貴を殺したの？私にとってあの事故以来唯一の肉親だったのに！」

確かに兄貴は貴方を刺そうとした。でも、私から兄貴を奪うなんて酷いじゃない！

返して！返してよ！私の家族を！」

そんな叫びも、屍には届くはずもない。

「もう・・・私も兄貴の所行こうかな・・・。」

そんな少女の声は叫びすぎて枯れていた。

「じゃあね・・・この世。」

（後書き）

これ、妹サイドあつたら面白いよね。

とはいえ、最後まで読んでいただき、ありがとうございました！

・・・後四作完成させなきゃ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7727m/>

文章力不足注意「夏祭り」・・・友達が季節ネタをやってきたので晒す。

2010年10月9日06時07分発行